『八代市厚生会館のホール再開を求める会』通信　号外

八代市が厚生会館の閉鎖・将来的解体を発表

八代市は４月２７日、「八代市厚生会館の今後の方向性について」として、「新八代駅周辺に整備を予定している文化コンベンションセンター（仮称）に、その機能の一部を移転」したうえで、厚生会館を「閉館とすることを決定しました」と発表しました。

発表の中では、厚生会館について「八代城跡をはじめ松濱軒や松井神社、博物館、お祭りでんでん館などといった八代市が誇る文化集積地の中心に位置し、６０年以上の長きにわたり、まさに本市における『文化の殿堂』として、その存在感を示してまいりました。また、一流のオーケストラ等にも満足いただける優れた音響空間を備え、市民の皆様に良質な芸術文化の観賞と体験の場を提供する一方で、中心市街地に立地する身近なホールとして、市内の園児や小中高校生、文化活動団体などの発表や交流の場という役割も担ってきたところであります。人々が集い、人々に感動と希望をもたらし、人々の創造性を育む地域の文化拠点として、最盛期には、年間４０万人を超える利用者数を記録することもあり、中心市街地の賑わい創出にも寄与してまいりました。さらには、著名な建築家である芦原義信氏により設計され、近代建築としての価値も高く評価されており、八代城跡をはじめとする歴史的周辺環境とも調和した施設でもあります。文化的側面や建築物としての価値などから、高い評価をいただいてきました」としています。

これらの事柄は、「ホール再開を求める会」が署名活動を開始した際の趣意書や市に提出した要望書・提言書などで「厚生会館が持つ価値を知ってほしい」と繰り返し訴えてきた内容です。ようやく市も理解してくれたようです。しかしながら、「老朽化に伴う維持管理費の増大や採算性、駐車場不足などの課題が多額の費用をかけて改修したとしても解決できない。また、厚生会館を存続させた場合、改修後の耐用年数である約２０年後、仮に建物が使用可能であったとしても、再度、多額の投資を行うのかといった議論は避けることができません。未来を担う次の世代にそのような課題を残してはならない」と理由を挙げたうえで、「厚生会館については閉館することとし、次回の市議会６月定例会に廃止条例を提案することを決定しました」としています。

これらの「理由」については、維持管理費の増大や将来的な投資について言えば、他の文化ホールも同様の状況にあり、なぜ厚生会館についてのみそれが殊更言われるのか、腑に落ちません。採算性については、これまで文化・芸能興業の専門家も置かずに、市の行政職員が数年おきに異動し担当するという状況において、どれだけの運営ができたのかという問題に触れていません。駐車場不足も「長年課題だった」ということは、その間に解決策を出してこなかったことになります。

一方、市の発表では、厚生会館について、市民に良質な芸術文化の鑑賞と体験の場を提供してきたという「文化的な価値」、市民に身近なホールとして寄与してきた「中心市街地の賑わいの創出」、著名な建築家である芦原義信氏により設計された「近代建築としての価値」という３つの「機能」があると整理しています。そうした「機能の一部を移転」し、文化コンベンションセンター（仮称）の整備や桜十字ホールやつしろの利活用促進などをしていく方針を打ち出しています。

しかし、そもそも厚生会館が今の位置にあってこそ、それらの機能は発揮されるのです。まさに「八代城跡をはじめ松濱軒や松井神社、博物館、お祭りでんでん館などといった八代市が誇る文化集積地」において建築物として重要なピースになっていること、またそのことによって厚生会館の価値がどれだけ複層的に増しているのか、といった視点がありません。

「再開を求める会」では、市の「閉館」方針決定の発表に対して即日、撤回を求める抗議文を提出しました。今後も新しい５人の共同体制のもと、取り組んでいきます。

八代市厚生会館「閉館」方針に対する抗議文

八代市厚生会館のホール再開を求める会
［共同代表］丸山久美子　佐藤士郎　磯田節子　甲斐田栄　木田哲次

本日の記者会見において、中村市長は八代市厚生会館について「閉館することを決定した」と発表されました。さらに、報道機関の取材に対して「その後は解体する」という発言もされたと聞き及んでおります。

八代市厚生会館は、近代建築史における重要性、国内外の演奏家らが絶賛する音響の良さ、能などの古典芸能を正式な形で上演できる上質な設備をそれぞれ備えているほか、何よりも多くの市民がたくさんの思い入れと記憶を持っており、築６０年の単なるコンクリート建造物というだけでは収まらないホールであることは、市も理解されていると信じております。こうした八代市、ひいては県南の文化の殿堂でもある厚生会館を「八代の宝」と呼ぶ以外に、どのような呼び方があるでしょうか。

また、芦原義信氏が設計したこの厚生会館の周囲には、伊東豊雄氏設計の「八代市立博物館未来の森ミュージアム」や若手建築家の平田晃久氏による「お祭りでんでん館」など我が国を代表する建築家による作品が連なるだけでなく、八代城址や松浜軒なども集積する区域であり、このような建築的に贅沢な空間は他では見ることができない八代独特のものです。こうした区域から厚生会館をなくしてしまうことは、八代市の魅力の「磨き上げ」に逆行するどころか、魅力の半減につながるものです。

つまり、厚生会館はそれ単体の価値の高さは元より、この場に存し続けることでその価値が複層的に増し、他に「機能移転」なることができる存在ではありません。さらに、費用のかかる耐震改修もすでに終えて震度７に耐えられるにもかかわらず、これを利用しないのは、まさに「もったいない」の極みです。

八代市が令和３年春に突然、八代市厚生会館のホール利用中止を公表して以降、多くの市民から「納得できない」「利用させてほしい」という声が上がり、それは１万筆を超える「ホール再開を求める署名」になりました。その数年前から市はすでに必要な改修・補修をしないでいただけでなく、ホール利用中止が政策決定されるまでの過程も疑問が数多く残ったままです。改修費として試算されている約２０億円についても、数年かけて計画的に改修するといった長寿命化がなぜ検討されないのか、これも疑問です。

八代市議会でも与野党双方の議員から「市民の理解を得る努力をしてほしい」と再三指摘されてきました。市はようやく昨年９月に内部見学会、同１１月に意見交換会を市民向けに開催しましたが、「八代の宝をなぜ市民に利用させないのか」といった多くの疑問は解消されないままです。そして本日、突然、今度は「閉館」という発表がされました。

市民の財産であり、「八代の宝」でもある八代市厚生会館が、広範な市民の納得もないまま「閉館」とされることに対して、最大限の言葉を持って抗議するとともに、その撤回を強く求めます。

2023年4月27日、八代市による厚生会館「閉鎖」発表を受け、同日「求める会」共同代表５名のもと作成し、市へ提出した抗議文の全文

2023年4月27日、八代市へ抗議文を提出する「求める会」共同代表の佐藤士郎氏（写真左）と磯田節子氏